

編集後記

■『Language Education』11号が完成し皆様にお届けすることができ安堵している。2012年度より語学教育研究所長に就任したが、振り返ってみると、私が5代目にあたり、紀要発行からすでに10号を数えていた。11号にあたる今号は、構成に幅をもたせた。今後も内容をより充実させたいと考えている。

■紀要の構成は、これまで論文が主体であったが、論文に加えて研究ノート、書評、講演記録などを盛り込み、研究所の活動がより具体的に示されることになった。また、これまで発行された紀要の目次を掲載した。この目次は研究所の変遷と軌跡を示し、研究所の重要な活動記録となっている。

■本号には論文2本、研究ノート3本、書評1本、講演会記録1本が収められている。

■大学における語学教育、特に外国語教育は、英語は国際コミュニケーションに欠かせない地位を保っているが、「国際化」を考えると、英語以外の外国語も今後重視されるであろう。江戸川大学では、フランス語、韓国語、中国語の教育が行われ、学生の興味・関心も高い。こうした実情を踏まえて、本学で教鞭を取ってくださる先生方に紀要執筆のお声掛けをさせていただいた。今回、韓国語の李ソラ先生からの投稿をいただいた。ご多用中のところ、ご投稿いただき心から感謝したい。韓国と日本の出版事情の比較で、最新の情報が報告されており、興味深い内容となっている。紀要にあらたな方向が示される契機ともなってもらいたいと思う。

■2012年には、異文化理解の伸張や外国語学習に興味・関心を持ってもらうために、2回異文化理解と英語コミュニケーションをテーマにした文化講演会を行った。1回目は、加藤忠明特任教授のご協力を得て、インドから教育学者のアーミン・モディ氏をお迎えし「インドの若者たち」というテーマで2012年5月16日に講演を行った。通常授業の少ない水曜日の5時限という時間にもかかわらず、35名ほどの学生が参加し熱心にモディ氏の話に聞き入っていた。さらに、最後の質疑応答の際には、数人の学生が英語で質問しようと奮闘していた姿は印象的であった。たどたどしい英語であろうが、積極的に英語でコミュニケーションをとろうとする学生の姿はたくましく思えた。その記録は今号に「インドの若者は変わりゆくインド社会を支える強い力」と題し掲載してあるのでご高覧いただければ幸いである。

■2回目は日本のアイルランド研究の第一人者で中央大学教授の松村賢一氏を講師にお招きし「声の通路—異文化理解とコミュニケーションの風景—」と題し、新聞のヘッドラインに伺える〈シャレ〉からマザー・グースなどの英語のリズムの特徴、英語と日本語のことばの概念の比較など、多角的な視点から講演をしていただいた。情報文化学科の酒井和行先生と私の授業がタイアップし、100名ほどの学生が聴講した。酒井先生にあらためて御礼を申し上げたい。この記録は次号の紀要に掲載する予定である。

■最近の報道によると、現代の学生は海外に関心が薄くなっているらしい。実際、2004年から05年の80,000人台をピークに現在では50,000人台に減少している。(私が留学していた1980年代の10,000人そこそこという数値からすれば大幅に増加しているのだが)グローバル化が進行する世界で、積極的に海外体験を学生たちにしてもらいたい。本学にはニュージーランド研修やニュージーランドへの特待留学制度が設けられている。学生時代だからこそできる体験であり、それによって将来への指針を得られる貴重な機会にもなると思う。学生たちには、在学4年間を通じ、継続的に外国語を学んでもらい広い視野を獲得してもらいたい。本学の語学教育もその実現の手助けとなるような語学教育を研究してゆ

くつもりである。

■活動報告に示したように、学内でTOEICと英検を定期的に行っている。ここ数年受験者数は着実に増加している。本学の語学教育では、正規の授業以外にも学内受験前には対策講座などを適宜設けて資格取得にも力を注いでいる。キャリアセンターの協力を得て、学内周知に努めているが、学内受験ができることを知らない学生が多い。ゼミの先生や語学担当教員のお知らせや奨励によるものも大きい。今後とも全学的に奨励をお願い申し上げる。

■最後に、語学教育研究所員を初めとする語学担当教員の先生方のご尽力により、直実に語学教育の成果が見られる。感謝するとともに、今後のご協力とご尽力を引き続きお願い申し上げる。また、事務的仕事をいつも助けていただいた学術情報部の高橋恵美さんには、紀要発行にいたるまで特にお世話になった。感謝申し上げる。

(記 語学教育研究所長 海老澤 邦江)